おおうことによって、もっぱら観念の世界に引きこもり、『日本書紀』が定式化した「蕃国」観を保持し、自らを満足させようとしたわけです。九世紀にはいってからの遣唐使廃止にいたる過程にも、そうした要素をみることは可能でしょう。渤海は、実利を求めて日本の要請に応えるポーズをとりながら外交を継続させますが、十世紀初めに滅亡しました。こののちの日本は、どこの国とも正式の外交をもたない時代にはいりますが、朝鮮蕃国観は現実の交渉のなかで問い直される機会のないまま、天皇の存在とむすびついて保存されていくことになるのです。

Ⅳ　平安・鎌倉時代の日本と高麗

――自尊と憧憬

第9章 東アジア世界の変貌

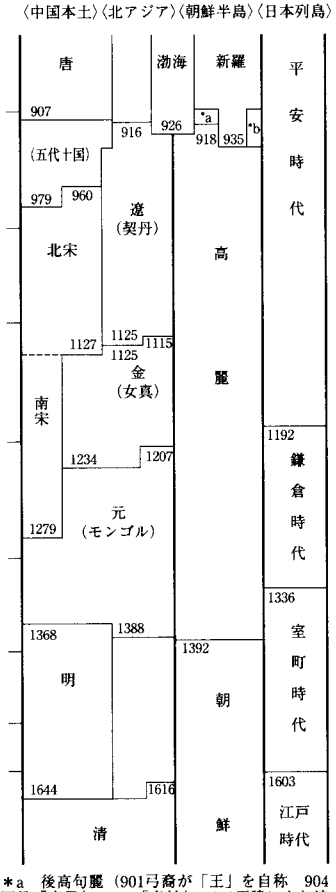
(1) 北方民族の台頭と高麗王朝

繁栄を誇った唐帝国も、安史の乱ののち動揺がはげしく、ついに九〇七年に滅亡してしまいました。これにつづいて九二六年には、渤海が契丹族によって滅ぼされます。朝鮮半島ではすでに、新羅王朝が地方豪族らの反乱にあって統制力を失い、首都慶州を中心とした地方政権に転落していました。豪族のひとり甄萱（キョンホン）は南西部地域に勢力をのばして後百済を建て、北方に拠点をおいた弓裔（クンイエ）が後高句麗を称して、新羅・後百済・後高句麗の分立する後三国時代となったのです。このなかから九一八年、弓裔の部下だった王建（ワンゴン）が松岳（いまの開城）地方を本拠として新たに高麗王朝を創建します。九三五年に新羅が降服、翌九三六年には後百済が滅んで、朝鮮半島は高麗の時代となりました。滅亡した渤海の遺民数万人も、これに合流したといわれます。

唐が滅んだあとの中国では、華北の地に五つの短命の王朝が相次いで交替し、地方でもいくつかの国家が分立する、いわゆる五代十国の時代となります。そのなかから九六〇年に趙匡胤が宋王朝を創

始し、やがて九七九年には全土を平定して中国の統一を回復しました。高麗は宋に入朝して冊封をうけ、宗属関係をむすびます。中国の統一王朝を中心に、周辺諸国がこれに朝貢するという構造は、唐滅亡後も継続することになったのです。

しかしながら、東アジア世界は、唐の時代とは様々な面で変貌しつつありました。その変化の第一は、北方民族が台頭し、漢族王朝に対する圧力を増大させたことです。まず十世紀に、モンゴル高原を中心に勢力を伸ばしたのが契丹族でした。九〇七年に建国したあと、前述のように渤海を滅ぼし、国号を中国風の遼としますが、九三六年には五代十国時代の華北に侵入し、現在の北京付近のいわゆる燕雲十六州を支配下に収めました。統一後の宋も、遂にこの燕雲十六州を回復することはできませんでした。そればかりか、一〇〇四年には遼を兄とし自らを弟とする形式の澶淵の盟をむすぶことを



＊a　後高句麗（901弓裔が「王」を自称　904国号「摩震」　911「泰封」　918王建により追われる）
＊b　後百済（892甄萱が建国　900「後百済王」を称する　936高麗により滅亡）

［9－1］　年表〈2〉

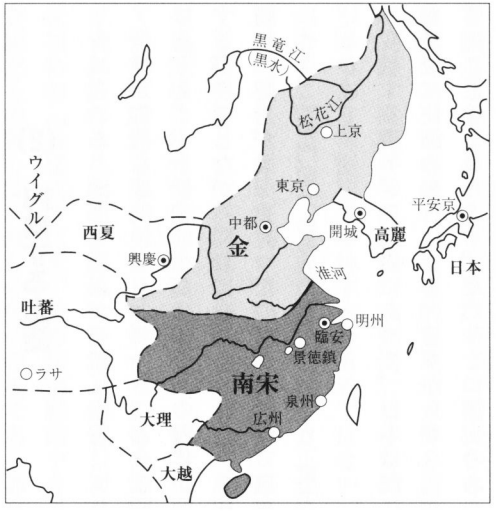
［9－2］　11世紀の東アジア

余儀なくされます。

十二世紀になると、こんどは中国東北部を中心に女真族が台頭して一一一五年に金を建国、二五年に遼を滅ぼしたあと、二七年には宋の都開封を陥れます。宋王朝はいったん滅亡し、長江の南に位置する臨安（いまの杭州）に拠って再興しますが、こののちの南宋は中国の南部を支配するだけの王朝となってしまいます。中国の北半分は異民族王朝である金の支配下に入ったわけで、しかも四二年の和約では、南宋は金に対して臣下の礼をとらざるをえませんでした。六五年の第二次和約で叔と姪の関係に改められましたが、金の優位にかわりありません。

このような北方民族による勢力拡大の波は、高麗にも直接に及んできました。九九三年から一〇一九年の間に三度にわたり遼（契丹）の大軍が鴨緑江を越えて侵入し、都の開京（ケギョン）（開城）までが攻撃にさらされます。徐熙（ソヒ）や姜邯贊（カンガムチャン）らの活躍で撤退させたものの、遼の冊封をうけて宗属関係を結ばざるを得ませんでした。さらに十二世紀にはいって金（女真）が遼を滅ぼしたあと、高麗は金の冊封をうけることになります。

遼の第一次侵入のあとも高麗はひそかに宋へ使者を送りつづけましたが、三度目の攻撃ののちには宋との国交断絶を余儀なくされました。しかし、一〇七一年になって、高麗は宋への朝貢を再開します。このあとも、一方で遼および金の冊封をうけながら、他方で宋との間に使節を往来させつづけました。唐代のような漢族の統一王朝を中心とした一元的な体制がくずれ、複数の冊封関係が重層的に展開する情勢は、高麗にとって自存のための苦しい対応をせまるものでしたが、それだけ冷徹に状況を見定め、したたかな外交を模索する契機ともなったのです。高麗の国家祭祀のひとつ八関会における外国人朝賀の儀式では、宋商人のほか、女真人や耽羅（済州島）人、ときには日本人が参列し、朝貢国の使節になぞらえて国王に拝謁、方物を献上しています。自国を中心にすえた国際秩序が構想され、演出されているわけで、ここに高麗王朝の自立的な外交姿勢の一端をうかがうことができるでしょう。



［9－3］　12世紀の東アジア

(2) 内向する意識

唐滅亡のあと渤海や新羅が連鎖反応的に倒れたのは、けっして偶然でなく、唐を中心とした東アジア世界が密接な連関性をもっていたことを証明するものでした。日本もそうした国際情勢と無関係ではありえず、十世紀前半には律令制の解体が明確になります。九三九年の平将門の乱は、それを象徴する事件でしたが、関東に自立し「新皇」を称するにあたって将門は、今が実力の世の中であると強調し、契丹が渤海を討ったのにかこつけて自らの行動を正当化したといわれます。将門自身が言ったにせよ、『将門記』の作者の創作にせよ、東アジアの動乱と日本国内の変乱とを結びつけて意識しているわけです。

変貌する東アジア世界にあって、日本は既に遣唐使を廃止していました。新羅との間でも七七九年を最後に使節の来日はなく、日本からも八三六年に遣唐使の安全を要請する使者が派遣されたのが実質的に最後となります。ただひとつ国交のあった渤海とも、日本からの使節派遣は八一一年以来なく、九一九年の使節来日を最後にして渤海自体が滅亡してしまいました。渤海を滅ぼした契丹は、一時その地に東丹国をたて、その使者が九二九年に来日しましたが、日本は国交を拒否し、これ以後はいずれの国とも正式の国交をもたない、いわば「鎖国」の時代にはいります。

すなわち、中国からは、五代十国の時期にしばしば南方の呉越国から使者がおとずれており、宋代になってからも朝貢をよびかける使者が何度か派遣されてきましたが、日本はついに国交を開こうとしませんでした。朝鮮半島からは、後三国のひとつ後百済から九二二年および九二九年の二度にわたって使者が来ましたが、二度とも通交を拒否します。高麗による統一後には、九三七年、九三九年、九四〇年と連続して使者が来日しました。しかし、これらに対しても日本は、牒状の書式が蕃国のものでなく無礼だというような理由をつけて、国交開始の要求を拒絶しています。

一〇一九年に女真人の船団が九州北部を襲った刀伊の入寇のあと、高麗水軍が刀伊によって連れ去られた日本人二百数十名を奪回し、送り返してくる事件が発生しましたが、この際も、日本政府は通交をひらこうとしませんでした。また、高麗は七九年、重病にかかった国王文宗（ムンジョン）の治療のため名医を派遣してくれるよう大宰府あての書状をおくってきました。報告をうけた朝廷では派遣すべしとの議論もあったものの、消極的意見が大勢を占めて招請を断ります。大江匡房がつくったといわれる返牒では、高麗からの牒状が「先例」にそむいており、そこで使われている「聖旨」という言葉は「蕃王」である高麗国王が称すべきものではない、などと強調しています。

このようにして、日本はどこの国とも正式の外交関係をもたない状態をつづけることになります。外交的な孤立は、東アジア全体の激動から距離を置く政策として機能し、律令制の崩壊にもかかわらず王朝交替という劇的変革にいたらなかった要因のひとつになったと考えられますが、そのなかで中央貴族層の海外情勢への関心は著しく低下し、内向きの閉鎖的な意識がいっそう強まりました。

平安貴族たちは、ケガレに対する恐怖の意識に深くとらわれていたといわれます。死や血などのケガレに触れることを極端におそれ、回避しようとしました。ケガレは感染するものと考えられ、十世紀初めの『延喜式』にも、その伝染経路やキヨメの方法、消滅の期間までが細かく規定されています。貴族たちの関心は、自らの生活の場である都をケガレから護り、清浄に保つことにありました。清浄

な都から畿内、さらに周辺地域へとケガレの程度が強まっていき、国境の外、すなわち異国とはケガレが充満するところと観念されることになります。清浄の中心に位置するのが天皇であり、したがって天皇はケガレから身を護るために幾重ものタブーにとりまかれていました。

十世紀初めの宇多天皇は、天子たるものは外国人に拝謁をゆるしてはならず、やむをえない場合は簾を隔てておこなうべきだと遺言したといわれます。また、醍醐天皇は、異国の占い師を都に入れてしまったことを「本朝の恥」と悔やんだとされています。このため、『源氏物語』では、来日した高麗人の占い師を宮中には呼べないので、光源氏はわざわざ宿舎へ出向いて人相を占ってもらいます。『平家物語』にも、平清盛の病が重くなり宋人の医者を呼ぼうとしたとき、宇多天皇以来の戒めがあるからとして取り止めになったという話がでてきます。貴族層のこうした意識が外国との通交を遮断する政策の基盤となり、外交の断絶は自閉的で内向的な風潮をいっそう強めていく要因となりました。

(3) 東アジア交易圏

しかし、正式の外交関係を断ったからといって、日本がまったく周辺諸地域との交流をなくしてしまったことを意味するわけではありません。北方民族の台頭とともに、唐滅亡後の東アジア世界の変貌を特徴づける第二の点は、交易関係の著しい発展、東アジア交易圏の形成というべき現象でした。

遣唐使廃止の決定は八九四年のことでしたが、実際に最後の遣唐使となった藤原常嗣一行が出発したのは八三八年で、翌年には帰国しています。この時の遣唐船で入唐したのが天台宗の高僧円仁でした。円仁は唐にとどまって修業し、八四七年に帰国したあと『入唐求法巡礼行記』を著しますが、それにしても、すでに遣唐船は派遣されなくなっているのに、十年近く在唐した円仁がどのようにして帰国できたのでしょう。円仁が帰国に際して利用したのは、日本へ向かう新羅商人の船でした。この当時、唐・新羅・日本のあいだを商船が往き来するような状況が生まれていたのです。そもそも円仁とともに入唐した遣唐使一行も、さんざん苦労して唐に着いたあと、構造上危険な自分たちの船を破却し、新羅船九艘と新羅人水夫六十余名を雇い入れて帰国したのでした。

円仁の記述によれば、楚州や泗州漣水県など中国の沿海地方には各所に新羅坊とよばれる新羅人の居住区がつくられていました。山東半島の登州文登県の赤山にもそうした新羅人の住む地区があり、円仁は法華院という寺院で、新羅僧の世話をうけます。赤山法華院を建てたのは、新羅から唐に渡って軍人として出世し、唐・新羅・日本を舞台に商業活動で財をなした張保皐（チャンポコ）（張弓福）という人物でした。張保皐は、日本史料には張宝高という名で出てきますが、八二四年に自ら大宰府に来航して貿易活動をおこなっています。八二八年には唐から新羅に帰国、新羅政府から海賊取り締まりの権限を与えられ、清海鎮大使という地位をえて勢力をかためました。八四〇年にもその使者が大宰府に来航したことが記録されています。その翌年には王位継承問題にかかわって反乱をおこし、暗殺されてしまいますが、このような人物が活躍する時代となっていたのです。

九世紀半ば以降には、唐の商船の来航記事が増加します。ついでにいえば、八九四年に菅原道真が遣唐使廃止を提議する際、唐の衰退を伝える在唐僧中瓘の書簡を根拠としましたが、この手紙は、唐の商船によって運ばれてきたものでした。中瓘自身、唐の商船に乗って入唐しています。こうした商

［９－４］　宋船の高麗への渡航

期　間	人　数
1012～1020年	269名
1021～1030年	122名
1031～1040年	409名
1041～1050年	135名
1051～1060年	664名
1061～1070年	21名
1071～1080年	342名
1081～1090年	516名
1091～1100年	345名
1101～1110年	219名
1111～1120年	3名
1121～1130年	50名
1131～1140年	64名
1141～1150年	755名
1151～1160年	556名
1161～1170年	367名
1171～1180年	6名
1181～1190年	0名
1191～1200年	1名

（李領『倭寇と日麗関係史』より）

船の往来があったからこそ、遣唐使を派遣する必要がなくなったともいえるのです。

唐と新羅が滅んだあと、五代十国の時期には、南方の呉越国からの来航がめだちます。さらに、東アジア海域での交易活動は、宋代に入り産業の発展を背景にしていっそう盛んになりました。宋は積極的な貿易振興策をとり、貿易管理をおこなう市舶司を広州・杭州・明州・泉州に設置しますが、このうち日本や高麗へ向かう船舶は、明州の市舶司が管轄しました。高麗からも、九七二年に南原・金州府使の使者が来日しますが、その目的は交易にあったとみられ、九七五年にも「高麗国交易使」が帰京したという記録があるなど、交易活動がつづいていたことがうかがえます。

対外交易の管理は大宰府が担当し、商船が来航すると朝廷へ報告、京から交易唐物使が派遣されました。大宰府の外港博多に設けられた鴻臚館において、唐物使が優先的に朝廷が必要とする物資を購入し、そのあとで一般の交易が許されるというシステムがとられましたが、しだいに中央からの派遣は少なくなり、大宰府に委任するようになっていきます。鴻臚館跡の発掘調査では大量の中国陶磁片が出土し、交易規模の大きさが明らかになりました。十一世紀後半以降になると、取引の中心は東に移って現在の博多駅の北側一帯の地域が発達し、のちに「大唐街」と呼ばれるようになる宋商人の居

［９－５］　日本船の高麗への渡航

1073年	文宗27年	（７月）日本国人王則貞・松永年ら42人が来航し螺鈿鞍橋・刀などを請進。壱岐島勾當官が藤井安国ら33人を遣して方物貢進を奏請。
		（11月）八関会を設く。大宋・黒水・耽羅・日本など諸国人が礼物名馬を献ず。
1074年	文宗28年	（２月）日本国船頭重利ら39人来りて土物を献ず。
1075年	文宗29年	（閏月）日本商人大江ら18人来りて貢献す。
		（６月）日本人朝元・時経ら12人が来貢。
		（７月）日本商人59人が来る。
1076年	文宗30年	（10月）日本国僧俗25人が霊光郡に到り仏像を献じて国王の寿を祝う。
1078年	文宗32年	（９月）日本国、耽羅漂流民高礪ら18人を送還。
1079年	文宗33年	（９月）日本国、高麗漂風商人安光ら44人を送還。
		（11月）日本商客藤原ら来貢。
1080年	文宗34年	（閏月）日本国薩摩州、遣使して方物を献ず。
1082年	文宗36年	（11月）日本対馬島、遣使して方物を献ず。
1084年	宣宗元年	（６月）日本国築前州商客信通ら水銀を献ず。
1087年	宣宗４年	（３月）日本商重元・親宗ら32人来貢。
		（６月）日本国対馬島元平ら40人が真珠など献ず。
1089年	宣宗６年	（８月）日本国大宰府商客が来航して真珠など献ず
1093年	宣宗10年	（７月）延平島巡検軍、宋人12人・倭人19人の乗船を海賊と見做して拿捕。

（森克己『日宋貿易の研究』より作成）

住区がつくられました。この博多遺跡群からは、さらに多くの貿易陶磁が発掘されていますが、ここで取引された商品が国内各地へ運ばれていったものと考えられます。薩摩の坊津や筑前の今津、越前の敦賀などには、宋船の来航もあったといわれます。

(4)　海外への憧れ

宋や高麗からの来航ばかりでなく、同じ十一世紀後半には、日本居住の宋人を含め、日本から海外へ渡航する商船の数が増加します。当初、その渡航先は高麗が中心でした。遼の冊封をうけて国交が途絶えたあとも宋商船の高麗来航はつづいていまし

たが、前述したとおり、十一世紀後半に高麗は宋との通交を再開するなど積極的な政策を展開します。このため、首都開京の外港にあたる礼成港には宋船がいっそう頻繁に訪れており、それに引き寄せられるように、日本からの商船の渡航も盛んになったのです。例えば一〇七三年には、王則貞・松永年ら四十二人の来航が記録されていますが、当地では宋から来た商人との中継貿易もおこなわれたと考えられます。こうしたなかで、前述の八関会に参席する日本商人もあらわれたのでしょう。医師派遣要請の書状も王則貞に託されたものでした。

一〇九三年には、日本船が海賊の疑いで高麗水軍に拿捕される事件がおこり、このあと、高麗の史料からは日本船来航の記事は減少します。十二世紀になると、華北が金の支配下に入ったこともあって、直接に南宋へ渡航する日本船が多くなっていきました。しかしながら、南宋から高麗への来航はつづいており、日本からの商船もなくなったわけではありません。高麗側の本来の日本との交渉窓口である金州（金海）の東南海都部署への渡航は、頻繁におこなわれていたものとみられます。

交易でもたらされたものは、陶磁器や銅銭のほか、錦や綾などの絹織物、香料や顔料、書籍や絵画など貴族たちの欲求する奢侈品が中心でしたが、商船が来着すると、都の貴族たちが争って使者を派遣し、物品を購入するため価格が高騰したといいます。『枕草子』は「めでたきものは」の条で、まず最初に「からにしき」をあげており、『平家物語』は平氏の繁栄ぶりを、「楊州の金、荊州の珠、呉郡の綾、蜀江の錦、七珍万宝、一として闕（かけ）たる事なし」と描きます。外への関心を希薄化し、内向きな傾向を強めたといわれる平安貴族ですが、彼らの舶来品への憧れにはたいへんなものがありました。

清少納言にせよ紫式部にせよ、その教養は中国文化に深く裏打ちされていたのであり、「国風文化」

という言葉は、慎重に検討されなければならない問題をはらんでいます。海外文化への憧憬は、海を渡った僧の数にもうかがえます。円仁のあとも天台山・五台山の巡礼をめざし、商船に便乗して渡航する僧はあとを断ちませんでしたが、宋代になってからも、九八三年に入宋して釈迦如来像を持ち帰った奝然（ちょうねん）はじめたくさんの僧侶が海を渡りました。一〇八三年に渡海した戒覚は、「心こそ／うれしかりけれ／命あれば／唐の都を／今日みつるかな」と宋の都開封をみたときの感激をうたっています。戒覚は宋の地で客死、ふたたび日本の土を踏むことはありませんでした。

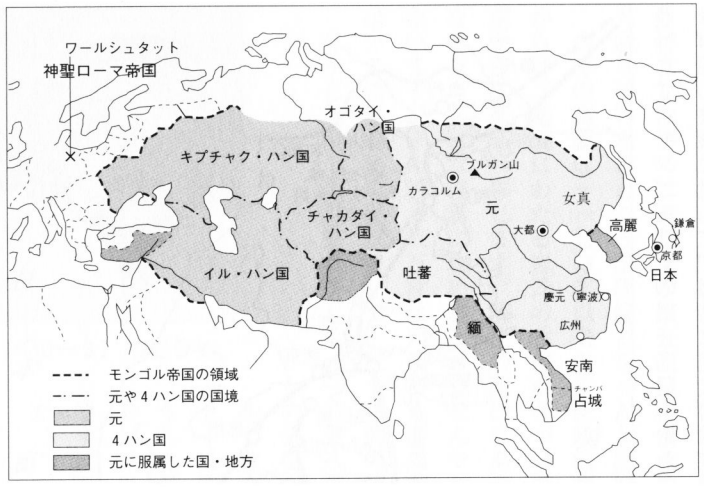
このような交易の発達に、積極的な対応をこころみたのが平氏政権でした。清盛は音戸の瀬戸を開削し、大輪田泊を改修して宋船を直接に瀬戸内海に導き入れ、一一七〇年には後白河上皇とともに宋人と会見して、九条兼実を「天魔の所為か」と嘆かせました。七二年には、宋皇帝孝宗が地方官を介して「日本国王」後白河上皇と「太政大臣」清盛に国書と贈物をおくってきたのに対し、「太上天皇」「日本国沙門」の名で返書をおくっています。平氏政権は短命におわりますが、鎌倉幕府にも交易に対する関心は引き継がれ、三代将軍源実朝が渡宋船をつくったものの由比ケ浜での進水に失敗した話はよく知られているとおりです。由比ケ浜や材木座海岸では輸入陶磁器の破片が大量に発見されています。博多などから、さらに国内海上交易のルートで運ばれたものとみられ、東アジア交易圏の広がりをうかがうことができるでしょう。高麗との交易も、ひきつづき対馬と金州の間を中心に展開されました。高麗国王への進奉とそれに対する回賜という形式でおこなわれたもようで、十三世紀初頭の記事では、進奉船の派遣が年一回二艘と定約されていたといいます。

第10章 モンゴルの襲来

(1) 高麗の抵抗

北方勢力拡大の波は、十三世紀のモンゴル族に至って頂点に達し、それは直接に日本へも及ぶことになります。二度にわたるモンゴルの来襲です。「元寇」という言葉は対外危機の深まる幕末維新の時期にひろまったものですが、この外敵襲来の事件は、明治以降の歴史教育のなかで国家意識を高揚させる恰好の教材とされてきました。そこでは、「神風」によって救われた「神国日本」の特殊性と、外圧をはねのけた日本武士の勇敢性が強調されました。他の国々がモンゴルに屈伏したなかで、日本だけが勇敢に戦い、侵略をまぬかれたと喧伝されたわけです。「神風」の物語が戦争への思想動員のために利用されたことは、指摘するまでもありません。

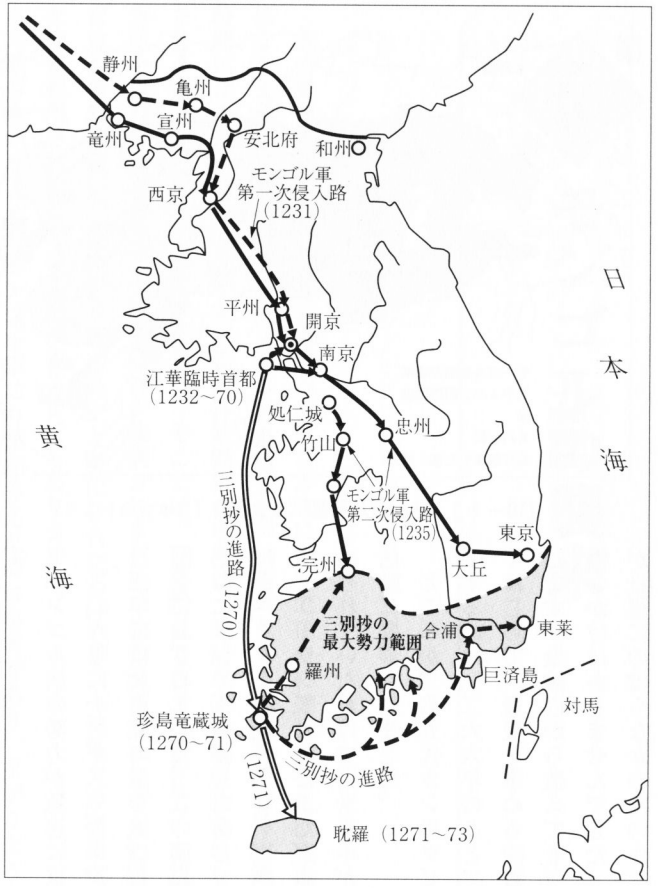
大風の吹いたことがモンゴル軍に打撃を与えたのは事実であり、まがりなりにも武士層の抵抗があったからこそ好結果を呼び込むこともできたのですが、そうした抵抗を可能にした条件は何だったのか。また、二度の来襲だけで済み、なぜ三度目の侵攻がなかったのか。そもそも、日本の抵抗だけが、それほど突出していたのかどうか。アジア各地の動勢のなかに位置付けて考えてみる必要があります。



[10－1] モンゴル帝国（東京書籍『日本史B』より）

モンゴル族の勢力が急速に拡大しはじめたのは、一二〇六年にチンギス・カンが即位してから。一二三四年には女真族の金を滅ぼして中国の北半分を支配下におさめました。この間に中央アジアを席巻し、さらにロシアを征服したあと、一二四一年にはワールシュタットの戦いでヨーロッパ世界を震撼させます。ユーラシア大陸にまたがる大帝国の建設がすすめられていたわけで、世界中がモンゴルによる征服活動に翻弄されました。

ところが、第五代カンのクビライが日本計画に着手するのは一二六六年のことであり、この年になってはじめて、通交を求める詔書をもった使者を派遣します。金滅亡から数えても三十年余り、日本への働きかけはありませんでした。なぜ、日本への遠征が日程にのぼらなかったのか。それが第一の問題で



［10－2］ モンゴルの高麗侵攻（朝鮮史研究会編『入門朝鮮の歴史』より）

並行して、モンゴルはすでに一二三一年から高麗への侵略を開始していました。ところが、高麗はモンゴルの攻撃に対して、容易に屈伏せず、一二五九年まで実に三十年ちかくも抵抗をつづけたのです。この期間は、モンゴル襲来と戦う主体となった武家政権としての鎌倉幕府が、承久の乱をきりぬけたあと、北条氏を中心に基礎を固める重要な時期にあたっています。三十年間の猶予が、なぜ与えられることになったのでしょうか。

金への攻撃と

この間、モンゴルは六度にわたって朝鮮半島への攻撃をくりかえし、高麗は全土がたいへんな被害をうけました。一二五四年の第五回目の侵入のときには、殺されたもの無数、捕虜となったもの二十万人余り、いたるところが灰燼となったと記録されています。

当時の高麗は一一七〇年以来の武臣政治の時代で、九六年に武臣のひとり崔忠献（チェチュホン）が実権をにぎってからは、四代にわたる崔氏の政権がつづいていました。崔氏政権は徹底抗戦の方針をとって、都を開京から江華島へ移します。漢江の河口にある江華島は、流れの速い海峡が要害となって、海戦の苦手なモンゴルには容易に攻め落とせませんでした。ここで高麗は、十六年かかって大蔵経の刊行をおこないます。その版木八万枚は、現在も慶尚南道にある海印寺に保存されていますが、崔氏の武臣政権は、この江華島を拠点にして、三十年間の抗戦を指揮したわけです。

しかし、国土の荒廃は著しく、一二五八年のクーデターで崔氏政権が倒れると、高麗はついに太子の倎を中国へ派遣して降伏の意志を示しました。ちょうどモンゴルではクビライが即位する時期に当たります。帝位についたクビライは倎を高麗国王に冊封し、護衛をつけて帰国させました。こうして長年の抗戦が終息します。高麗の降伏をまってようやく、モンゴルは日本問題を日程にのせることができるようになったのです。三十年間の余裕は、高麗の抵抗によって与えられたのでした。

［10－3］ クビライ

(2) 三別抄の反乱

一二六六年の最初の使者は朝鮮海峡の荒波を見てひきかえしてしまいましたが、クビライはあらためて朝鮮国王に日本への使者派遣を命じ、その使者が一二六八年に来日、国内は騒然となります。大宰府からの報告をうけた幕府は、これを朝廷にまわして判断を仰ぎました。「大蒙古国皇帝、書を日本国王に奉る」ではじまり、「兵を用いるに至っては、夫れ孰れか好む所ならん」でおわるクビライの詔書に、朝廷も幕府もいっさいの返答をおこなわず、高麗の使者はむなしく帰国します。このあと連年のように来た使者に対しても、日本側からの返答はなく、事態は緊迫の度を深めていきます。

クビライはすでに一二六八年、「あるいは南宋、あるいは日本、命に逆えば征討す」として高麗に徴兵と軍船建造を命じており、七〇年には日本遠征を視野にいれて高麗への駐屯を実施していました。にもかかわらず、実際に日本遠征がおこなわれたのは七四年になります。最初の使者の来日から数えると六年。なぜ、これだけの期間が空いてしまったのか。それが第二の問題です。この六年間こそは、異国警固番役の制度を整えるなど、まがりなりにも防備体制を構築するうえで決定的な意味をもつ期間でした。

空白の期間ができたのは、モンゴルにとって、そうせざるをえない事情があったからです。モンゴルに降伏したあとも、金氏・林氏ら武臣の政権が継続し、高麗の王室はなかなか江華島から出ようとしません。一二七〇年になり林惟茂（イムユム）が倒れて武臣政権が完全に終わりをつげ、ようやく開京へ都を戻すことになりました。この決定に反対し、あくまでもモンゴルへの抵抗を貫こうとして決起したのが、

三別抄（さんべつしょう）の部隊でした。三別抄とは、武臣政権時代に創設された高麗の正規軍で、三十年間のモンゴルとの戦争を担ってきた軍事力の中核でした。開京遷都は元への完全な屈伏になるとして、裵仲孫（ペジュンソン）は一千艘の兵船を率いて江華島を脱出したのです。「反蒙救国」をうったえるとともに、王族のひとりを推戴して正統政府を自称し、全羅道の珍島に本拠地をおいて全羅道の一帯を制圧しました。さらには慶尚道へも進出し、各地の農民が蜂起してこれに合流します。

日本への遠征となれば、まさに南部地方を出撃の拠点としなければなりません。兵員や軍糧の徴発、軍船の建造など、穀倉地帯であるこの地域が不可欠です。モンゴルは、まず、三別抄の鎮圧に全力をかたむけざるをえず、日本遠征はそのあとにまわすほかなくなってしまったのです。一二七一年になり、元軍の攻撃で珍島が陥落すると、三別抄は済州島へ移って抵抗をつづけました。

反乱が完全に鎮圧されるのは一二七三年四月。六月には、三別抄を滅ぼした将軍たちがあいついで開京へ凱旋しました。休む間もなく大都へ行ってクビライの前で会議を開き、その場で正式に日本出兵が決定されます。三年余におよぶ三別抄の反乱を鎮圧してはじめて、日本攻撃が可能になったのであり、この期間に日本は防戦の準備をすすめることができたのでした。第一次襲来の際、日本の軍勢がそれなりに抵抗し、モンゴル軍に大風による打撃を与えることになった背景は、このような事情によっています。

ところで、公卿吉田経長の日記『吉続記（きちぞくき）』には、文永八年、つまり一二七一年の九月に、高麗からの使者が書状を持ってきたが、その内容に不審な点があるというので、朝廷において連日のように協議がおこなわれた様子が記録されています。結局、事情がよくつかめないまま、返書も出さずに握り

［10－4］「高麗牒状不審条々」（東大史料編纂所蔵）

つぶすかたちとなったようなのですが、ここでいわれている高麗からの書簡とはいったい何なのか、不明となっていました。

ところが、いまから二十数年まえ、つまり当時から七百年以上たって、ひとつの古文書が発見されます。「高麗牒状不審条々」とした書付けで、一二六八年に使者がもってきた高麗国王の書簡と、新しくきた書簡とを対比し、記述内容の食い違う点を列記したものです。朝廷での協議のためにまとめられたものなのでしょう。以前の国書では蒙古の徳を讃えていたのに、今回のものは「韋毳（いもう）は遠慮なし」となっており、さらに「被髪左衽（ひはつさじん）は聖賢の悪（にく）む所」だと述べてモンゴルの風俗を野蛮視しています。そして、今回の書簡には、「江華に遷宅して四十年に近く、……仍ちまた珍島に遷都す」云々と書かれていたといいます。

『吉続記』に出てくる新たな高麗からの書状というのは、実は、珍島に本拠をおいた三別抄の反乱軍からのものだったのです。三別抄が日本に対し、連帯してモンゴルに対抗するよう呼び掛けたものだったことになります。しかし、朝廷も幕府も、朝鮮半島でおきていた事態を正確につかむことができず、呼び掛けにこたえることはできませんでした。

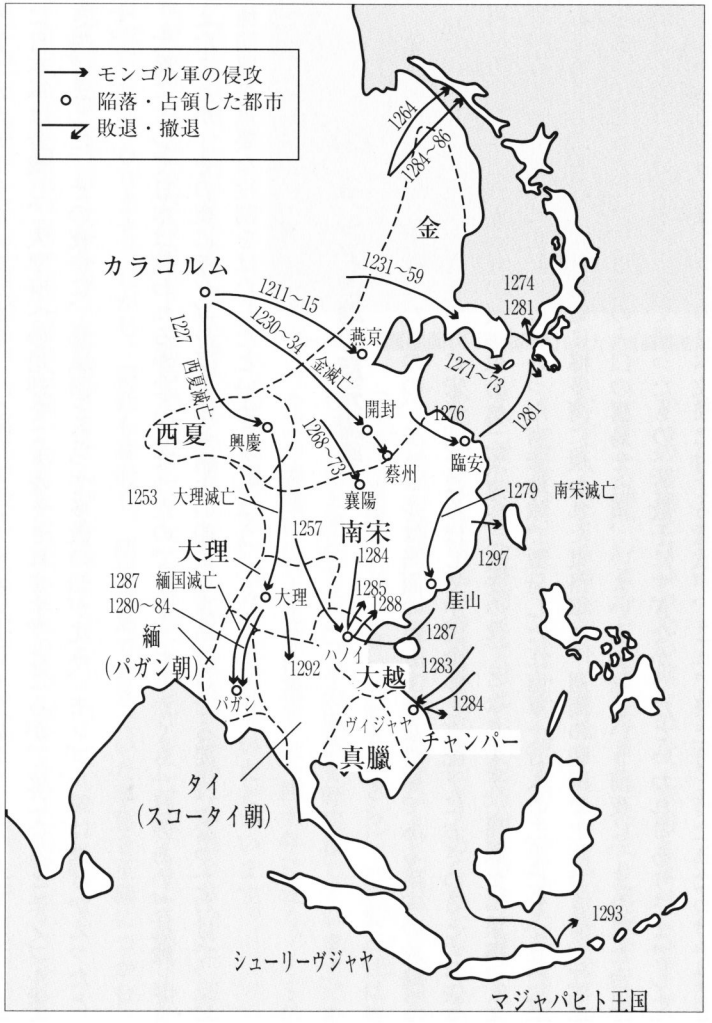
さて、反乱鎮圧の翌一二七四年、第一次日本遠征（文永の役）がようやく実行にうつされます。高麗に命じて建造した九百艘の軍船に、高麗で徴兵した兵士をあわせた三万数千人が分乗、対馬・壱岐を襲ったうえ博多湾にあらわれ、一〇月二〇日未明から上陸を開始しました。集団戦法や火薬玉などに日本軍は苦戦し、大宰府への退却をよぎなくされます。ところが、夜になるとモンゴル軍は船に引き揚げました。その夜中に、暴風雨となって多数の船が沈み、モンゴル軍は逃げかえったといわれます。

大風によって日本は救われるかたちとなったのですが、ともかくも一日のあいだ抗戦してもちこたえたことが、その夜にモンゴル軍を博多湾上の船にひきあげさせる要因になったわけで、六年間の準備期間が重要な役割をはたしたといえるでしょう。

(3) アジア各地の反元闘争

第一回の遠征には失敗したものの、モンゴルは当面の最も主要な目標である南宋の攻略をすすめました。そして、一二七九年ついに宋王朝をほろぼして中国全体を支配下におさめると、ただちに日本再征の準備にとりかかり、八一年の第二次遠征（弘安の役）となります。高麗を出撃拠点とする東路軍四万人と、新たに支配下にはいった南宋地域で徴発した江南軍十万人の二手に分かれた大軍勢が日本をめざしました。六月初旬に博多湾に現われた東路軍は一週間の戦闘で上陸できず、江南軍の到着をまって七月末に伊万里湾の入口の鷹島を占領、いよいよ上陸という前夜に、またまた台風にあって壊滅してしまいます。生きて帰ったもの三万数千にすぎなかったといわれるありさまでした。

しかしながら、モンゴルの日本攻撃に対する意欲が、これで終止符を打たれたわけではありません。



[10－5]　モンゴル軍の侵攻

(田中建夫編『世界歴史と国際交流』を参照)

国内の緊張と恐怖は依然として継続し、事実、クビライは三回目の遠征を考えていたのです。なぜ、それが実施されなかったのか。日本がモンゴルの侵略をまぬかれたという場合、この第三の問題まで含めて考えなければ不十分ということになります。

南宋征服のあとのクビライの発言は「日本及び交趾を征する戦船」の建造を命じるものでしたが、実際に日本遠征と並行して一二八〇年にはビルマのパガン朝を攻撃し、ベトナムへの圧力をいっそう強化しています。日本攻撃に失敗したあと、八二年にはチャンパへの遠征を開始したものの抵抗に遭遇し、台風の被害にあって大きな打撃をうけることになります。八四年には、再びチャンパへの遠征をおこないますが、これに対してチャンパ王は周辺各国に救援を求めました。ベトナムはモンゴルの側からも援軍を命じられていましたが、これを拒否してチャンパを支援し、カンボジアもまたモンゴルの要請を拒絶しました。モンゴル軍は八五年のはじめにベトナムを攻撃してハノイを占領したものの、三カ月後には撤退をよぎなくされます。

このように東南アジアへの攻略は、各地で抵抗にあって困難をきわめました。負担をおしつけられる中国南部の各地で、農民の反乱があいつぎます。そのうえ、モンゴル支配層内部で東方三王家の反乱がおきると、クビライは一二八六年、ついに日本遠征計画の中止を決めざるをえなくなりました。『元史』は、この決定を知って「江浙の軍民、歓声雷のごとし」という状況になったと書いています。第三次遠征からまぬがれえた背景に、こうしたアジア各地の反モンゴル闘争があったことになります。八七年にはモンゴル軍はベトナムに敗北して打撃を被り、翌年にはベトナムから撤退します。クビライはなおも、九二年に日本遠征計画を蒸返しますが、同年からのジャワ遠征は暴風にあって失敗にお

わり、日本攻撃の実施に踏み切る余裕はありませんでした。九四年のクビライの死とともに、三回目の日本遠征計画は立ち消えになったのです。

(4)「神風」

モンゴルの侵攻に対して日本だけが勇敢に戦ったわけではなく、「神風」すら日本にだけ吹いたわけでもありませんでした。戦闘の被害という点からみれば、結果として、むしろ日本のそれは軽微なものにとどまったともいえます。モンゴルの攻撃を撃退できたのも日本が特別だったからというより、高麗などアジア各地の戦いに助けられた側面を考慮にいれなければなりません。

それにしても、一連の過程における日本の対応に特徴的なのは、相手方との交渉らしきものがほとんどなされなかったということでしょう。最初にきたクビライの詔書を威圧的とみるか、むしろ丁寧なものだったとみるか見解が分かれるところですが、幕府にせよ朝廷にせよ、返答をだすことすらできなかったというのが実情で、判断するための情報自体がなかったというべきだと思われます。交易の発達があったとはいえ、いずれの国とも外交関係を断っていたことの反映でしょう。連帯をもとめる三別抄からの書状の意味を理解することなど、とうてい不可能でした。国内的には、この事件への対応をつうじて幕府は朝廷に対する優位や西国武士層への支配力を拡大させる方策をとっていきますが、朝廷にいたっては、ただひたすら寺社に命じて「異国調伏」の祈願をおこなわせただけでした。

したがって、交渉のなかで相手への認識が深まるというような契機はほとんどみることができず、

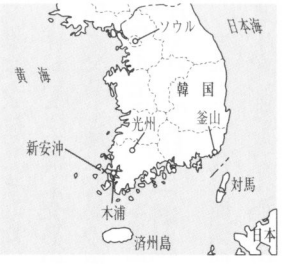
得体のしれない恐ろしいものとしての「ムクリ」(蒙古)、それと一緒になって攻めてきた「コクリ」(高句麗)への敵愾心のみがのこされることになります。まさしく神々への祈願のかいあって「神風」が吹き、この体験はもっぱら神国思想の深化に帰結していったようにみえます。そこでは、とりわけ神功皇后の伝説が強調されました。そして、『日本書紀』では金銀財宝の獲得を動機として説明されていた新羅征伐が、モンゴル襲来を経た鎌倉末期の『八幡愚童訓』においては、先に攻撃をうけたことへの仇討ちの話になります。屈服した新羅を馬飼にしたという部分は、神功皇后が「新羅国の大王は日本の犬なり」と石に書き付けたという物語にエスカレートしていきます。

モンゴルを専ら殺戮をこととする野蛮で恐ろしいものとするイメージは、近代にいたるまでうけつがれてきました。モンゴル帝国の戦略や構想、クビライの日本遠征の目的などに、改めて光があてられるのは近年のことがらに属します。ユーラシア大陸をおおう大帝国の建設は、東西交易に未曾有の発展をもたらしました。そのうえに実施されたクビライ時代の海軍による遠征は、東シナ海からインド洋にいたる海上交易の掌握と拡大をめざしたものといわれます。大都は運河によって海につながれ、陸上交易と海上交易の結節点となります。モンゴルは概して自由な民間貿易の振興策をとっており、実際のところ、日本遠征が実施されていた時期ですら中国沿岸の諸港では日本商船の取引がおこなわれていたのです。

一九七〇年代に韓国西南海岸の新安沖海底で発見された沈没船は、一三二〇年代のものと推定されますが、モンゴル襲来のあとも交易関係が依然として盛況だったことを示してくれます。ヘドロのなかに沈んで奇跡的に破損せずに残っていた船倉には、多額の銅銭とともに二万点にのぼる中国産陶磁

器が十個、二十個とひもで束ねて杉箱に梱包され、整然と荷積みされていました。何度も使用されたと思われる荷箱には、番号や荷主の名、「東福寺」などという送り先まで書かれており、注文に応じた組織的な商業活動が営まれていたことがうかがえます。中国南部の慶元（明州）を出帆し、朝鮮半島を経由して博多にむかう途中沈没したものと考えられています。

こうした商船の活発な往来にささえられ、宋代にひきつづいて中国に渡る僧の数は多数にのぼりました。元末の七十年間に記録に残っている禅僧の数だけでも二百数十人に達しており、留学ブームといっていいような情況がうまれています。学術・文化交流は盛況だったのです。日本は神国だという自尊の意識が昂進する一方で、同時に大陸文化への憧憬も衰えることはなかったといえるでしょう。



［10－6］ 新安沖の沈没船の発見物

V 室町時代・織豊政権期の日本と朝鮮

――敵対と融和